
支援会話シリーズ

レア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

支援会話シリーズ

【Nコード】

N1697B

【作者名】

レア

【あらすじ】

オリジナルな支援会話です！勝手に設定を作ったりします。

デイク&ロイ（前書き）

ロイの名前は何故ロイなのか。ロイドとデイク父子説を併せて作成。

ディーク&ロイ

ディーク&ロイC

「ロイ」

こんにちはディークさん

「ディーク」

どうもロイ將軍。あんたから話かけてくるなんて珍しいな

「ロイ」

あの、ディークさんや、

ディークさんの剣の腕について色々聞きたいと思ひまして

「ディーク」

？別に語るような事は何もないんだが。

俺は傭兵で、各地を渡り歩いてた。それだけだ

「ロイ」

そうでしょうか。皆がディークさんの人柄や剣技を褒めています

「ディーク」

おいおいよしてくれ、おだてても何も出ないぜ？

「ロイ」

そんな事はありません。これも人づてに聞いたのですが、何でも少年の頃から評判のエトルリアの剣闘士だったとか

「ディーク」

ああ、そんな事もあつたかな

ディーク&ロイB

「ロイ」

あの、良かったら教えて下さい、その剣技は誰から習ったものですか？

きっと優れた方だと思うのですが。

「ディーク」

優れていたかは知らないが、父親から教わった。
もう、とっくの昔に死んだがな

「ロイ」

あつすみません！

「ディーク」

いや、別にいいさ。將軍はどうだったんだ？

「ロイ」

はい。エトルリアのセシリア將軍の下でしばらく学び、
フェレに戻ってからは顔見知りの騎士達や父上に

何度か手合わせをして貰っていました。でも、まだまだです

「ディーク」

はは、俺が言うのもなんだが十分筋はいいと思うぜ、
だから自信を持ちな

「ロイ」

ありがとうございます！ディークさんにそう言われると嬉しいです。

あの、ディークさんの父上の事です。が名前を聞いてもいいですか？

「ディーク」

親父か？親父の名はロイドと言う。

…おっと、そろそろ行かなくちゃな。それじゃまたな、ロイ將軍

（ディーク消える）

「ロイ」

ロイド…？

ディーク&ロイA

「ロイ」

ディークさん

「ディーク」

？深刻そうな顔してどうしたんだ？

「ロイ」

はい。あの…実は、あなたに伝えたいことがあります

「ディーク」

？ああ

「ロイ」

僕の名前の事です。

僕の名前は、父が今でも尊敬している、

ある剣士の名前からとったのだと聞いています。

「デイク」

そうなのか、だが、それが何か？

「ロイ」

その剣士の名がロイドと言つのです

「デイク」

！

「ロイ」

残念ながら、二人の間に何があつたかまでは知りませんが、僕は幼い頃にその話を聞いてから、

ロイドと言つ名が常に心のどこかにありました

「デイク」

成る程な。だが、同名の奴なんざたくさんいるだろう。
面白い偶然だとは思うがな

「ロイ」

ええ。…おっしゃる通り、貴方の父上ではないかもしれませんが。
ですが伝えずにはいられなかったのです

「デイク」

そうか…わざわざありがとうよ

ジャファル&ルウ（前書き）

ジャファニノ前提の親子会話

ジャファル&ルウ

ジャファル&ルウC

「ルウ」

せーのっ…わっ…！

「ジャファル」

…ルウ、どうした。

「ルウ」

もー、父さんて鋭いな、後ろから近づいてもすぐ分かったやうなもの。

「ジャファル」

…そうか。

「ルウ」

父さん、いつもつけてるそのペンダント、見せて見せて！

「ジャファル」

ああ。

「ルウ」

…？この人達、誰？

「ジャファル」

彼が二ノの父ユーグ…そして二ノの母アイリス…

真中にいるのが二ノ、その横が双子の弟カイだ。…三人とももう、いないが

「ルウ」

そうなんだ…

「ジャファル」

お前やレイにとっては祖父母と叔父だ。

…二ノの義理の兄や、父の話は知ってるな。

「ルウ」

うん、たくさん聞かされたよ。

母さんの…血は繋がってないけど優しくて強い兄さん達と、父さんの話。

会いたかったなあ。

「ジャファル」

……。

「ルウ」

母さんも双子で、僕とレイも双子かあ。何だか不思議だね。

ジャファル&ルウB

「ルウ」

ねえ、父さん何してるの？

あつそのペンダント・・・鎖が切れちゃったのを直してたんだ。

「ジャファル」

ああ。

「ルウ」

へえ、父さんでもてこずること、あるんだ。ちよつと意外だなあ。

「ジャファル」

たまにはな。

「ルウ」

父さん、ちよつと聞いてもいい？

「ジャファル」

・・・何だ？

「ルウ」

戦いつて、何？

「ジャファル」

・・・何故、そのような事を聞く。

「ルウ」

母さんの父さんや、お兄さん達の話聞いた時に、何となく、気になっただ

「ジャファル」

戦場には尋常じゃない殺気に・・・

誰かに近寄ったら・・・やられると言つ空気が満ちている・・・

その後に、たくさんの涙を見る。

「ルウ」

そんな・・・やだ・・・やだよお！どうして戦わなきゃいけないのかな？話し合えば分かるかもしれないのに・・・。

「ジャファル」

すまない。・・・お前達に、関係のない話だ。

「ルウ」

・・・。

「ジャファル」

お前は…お前達は俺にとって…家族で…大事な宝だ。…絶対に守る。

「ルウ」

父さん・・・。

ルーズ&クラリーネ（前書き）

ルーズ&クラリーネの母娘会話。封印で、精神的成長を見せる前のクラリーネ

ルイズ&クラリーネ

ルイズ&クラリーネ

「クラリーネ」

お母様、お母様。

「ルイズ」

クラリーネ、どうしました？

「クラリーネ」

聞いて下さいな、私、とっても大きな目標が出来ましたの！

「ルイズ」

まあ、何かしら？

「クラリーネ」

私、エトルリアで一番のレディになりますわ！

お父様やお母様や、特にお兄様が誰にでも自慢出来るような、それはそれは立派なレディになりますの。

「ルイズ」

素敵な目標だわ、頑張るのよ、クラリーネ。

「クラリーネ」

ええ！

「ルイズ」

でも、あなたはどのようなレディが

エトルリアのレディだと思っているのかしら？

「クラリーネ」

そうですね、とにかく見目麗しいのが絶対条件ですね！
それと、丁寧な言葉遣いと上品な物腰でいる事ですね。

「ルイズ」

・・・他には無いのかしら？

「クラリーネ」

ええ、他のエトルリアの令嬢や貴婦人が気にかけているのは
見た目を飾ることだけですもの。

・・・きゃあっ！私とした事が髪が乱れていますわ！
ただちに直さないとっご機嫌ようお母様！

（クラリーネ消える）

「ルイズ」

あらあら・・・困りましたわね・・・。

ルイズ&クラリーネB

「クラリーネ」

お母様、どうして世の中には下品な人が多いのです？

「ルイズ」

下品？・・・どう言う事かしら？

「クラリーネ」

平民の事ですね。あんなセンスのない貧しい服を着て、粗末な物を

食べて…

どうして私達のように優雅に暮らせないのでしょね

「ルイズ」

…クラリーネ、私達が特別恵まれた暮らしをしているだけで、世の中のほとんどの人は、あなたの今言った服を着て、食べ物を食べているの。

何も変な事ではないのよ。私達が恵まれた暮らしをしていられるのは…

「クラリーネ」

分かっていますわ！お父様、そしてご先祖様のお陰、なのでしょう？

「ルイズ」

ええ、そうよ。…ねえクラリーネ、あなたはエトリアーのレディになると言っていたけれど、外見ばかりを気にする今のあなたの心のままでは、難しいかもしれないわね

「クラリーネ」

！どうすればいいんですの？

「ルイズ」

まずは、人を見かけや生活で判断しない事。

そして、笑顔を忘れない事よ。大切なのは心。

どんなに着飾ったところで、気持ちがついていかなくては何の意味もないのだから

「クラリーネ」

そうですね。…とっても難しいですわ。

エトリリアーのディへの道は、やっぱり険しいですね

ノア&ランス（前書き）

ケント×フィオーラでランス、
ダーツ×ファリナで息子ノアが前提
です。

ノア&ランス

ノア&ランスC

「ランス」

君は…ノア？

「ノア」

ランス！ランスじゃないか！！何と云うか、久し振りだな

「ランス」

やはり君だったのか！見違えたぞ、今までどうしていたんだ？

「ノア」

俺は、エデッサのゼロツト將軍の下で働いていて、

そしてロイ將軍に雇われる事になったんだ。といっても、俺はまだだかな。

君こそ、今までどうしていたんだい？

「ランス」

それは…

ノア&ランスB

「ランス」

…と言う訳で、俺は仲間と主人を失い、途方にくれていた

「ノア」

そうだったのか…

「ランス」

恥ずかしい話だが…

仲間を失い、主人も失っておめおめとイリアへ戻る事は出来ないと思ひ、

イリアへは戻らなかった。

そして俺の足は、いつしか父の故郷リキアへと向いていた

「ノア」

そうか、ケントさんはリキアの騎士だったな

「ランス」

ああ。そこでロイ様の父上であるエリウッド様に出会い、

仕える事になって今に至る。

「ノア」

ま、こっちで上手くやっているならいいが、お前相変わらず真面目だな。

お前に責任がある訳じゃないのに思い出しては悩んでたんだろ。つたく、お前は一人で抱え込みすぎなんだよ。そんなに背負い込んでるとはげるぞ

「ランス」

そ、そうだろうか？

「ノア」

ああ。お前のことは、昔からよく知ってるんだからな

ノア&ランスA

「ノア」

ランス！

「ランス」

どうした？

「ノア」

どうだ、俺の活躍見てくれてたか？

「ランス」

ふふ、そうだな・・・いつのまにか、立派な騎士になった。

「ノア」

？何か聞きたそうだな。

「ランス」

いや、ダーツ叔父上とファリナ叔母上は元気かと思ってな。

「ノア」

ああ、相変わらずあちこちを船で渡ってる。

「ランス」

父上や母上は・・・？

「ノア」

お二人共各地を回っておられる筈だ。

そうだ、この戦いが終わってから俺と一緒にイリアへ帰って見ないか？

「ランス」

しかし…

「ノア」

ケントさんも、フィオーラさんも、君の顔を見れば安心すると思うんだが。

俺も嬉しいぜ、何と言っても俺達は従兄弟なんだからな

「ランス」

ああ…

「ノア」

ま、気が向いたらでいいさ、けどその時は、俺にちゃんと声かけるんだぞ

「ランス」

ノア…ふふっ考えておこう。私はそろそろ出発するが、お前はどっ
する？

「ノア」

そうだな、一緒に行こう！

パント&ニノ（前書き）

魔法使い同士の会話。パントほどの人が、ニノの魔法の才能に目をつけない筈は無いと思います。

パント&二ノ

パント&二ノC

〔パント〕

こんにちは、お嬢さん。

〔二ノ〕

こんにちはお兄さん！あたし二ノだよ。お兄さんは？

〔パント〕

二ノか、私はパント、宜しく頼むよ。ところで君は魔道士かい？

〔二ノ〕

うん、そうだよ。お兄さんもだねっ。

〔パント〕

ああ。だが、どうしてそう思ったのかな？

〔二ノ〕

えへへ、何となく分かったやつた。

お兄さんすごいな、あたしでも分かるんだもん。きっと強いんでしょっ？

〔パント〕

ふふっ君も相当な使い手だと思うけどね。

〔二ノ〕

え？そ、そうかな？

〔パント〕

そうとも。もっと自信を持ちなさい、
君は原石だ、磨けばもっと光るようになる。

パント&二ノB

〔パント〕

二ノ！

〔二ノ〕

あ、パントさん。

〔パント〕

少し、話をしてもいいだろうか？

〔二ノ〕

？うん。

〔パント〕

ほら、君ならこの子達が見えるかと思って連れてきたんだ。

〔二ノ〕

あっ可愛い精霊さんだね♪パントさんはその子達と仲がいいんだっ

〔パント〕

うーむ・・・。

〔二ノ〕

？どうしたの？

「パント」

いや、本当に君は素晴らしいと思ってね。

「二ノ」

ええ！？

「パント」

ほら、魔道は彼ら精霊の力を借りるだろう？

「二ノ」

うんっ。

「パント」

君ほどの力がある人はね、大抵彼ら精霊を存在しないもの、または道具として見るようになる者がほとんどなんだ。もちろん、その考えを否定する事は出来ないのだけどね。

「二ノ」

そうなの？

「パント」

ああ・・・君みたいな考えの子がいてくれるのは嬉しいな。それに、やはり君は豊かな才能と感性に恵まれているんだね。

「二ノ」

ええっそんな事ないよ！！
だって、パントさんもあの子達の存在をちゃんと認めてあげてるじゃん。

〔パント〕

ははは、だが分かる者には分かる。

…君を見ていると、よく魔道を教えてあげた知り合いの女の子を思い出すよ。

その子も幼くても魔道の才能に溢れていてね。

よく共に森を散歩しながら精霊達と話した。君にも、彼らの声が聞こえるかい？

〔二ノ〕

うん。でもね、落ち着いて、

注意して聞くようにしないとすぐ聞こえなくなっちゃうけど。

〔パント〕

そうか。…また、色々と話をしに来てもいいだろうか？

〔二ノ〕

うん！

ウハイ&リン（前書き）

ウハイが、エリウッド軍に仲間になった場合を想定して作りました
{

ウハイ&リン

ウハイ&リンC

「リン」

ウハイ、ちょっといい？

「ウハイ」

…何だ？

「リン」

見ていて思ったのだけど、あなたのその馬上弓技、それに剣も相当なものね

「ウハイ」

お前の剣技も見事なものだ

「リン」

剣は、父に習ってたの

「ウハイ」

ならば、お前の父は余程の腕前だったのだろうな。

…そういうば聞いているなかった、お前は、どの部族だ？

「リン」

ロルカ族よ。父さんは族長だったの

「ウハイ」

！そうか…ロルカの事は噂に聞いている。ここまで、楽な道行きではなかったろう

「リン」

私には…絶対に果たすべき目的があるの

「ウハイ」

…敵討ちか

「リン」

！ええ、そうよ

ウハイ&リンB

「ウハイ」

リン

「リン」

ウハイ…

「ウハイ」

どうした、浮かぬ顔をしている。

「リン」

…もうなくなっちゃった私の一族の事を考えていたの

「ウハイ」

この戦いの間は、過去の事を考えるのはやめておけ

「リン」

！忘れろって言うの！？

「ウハイ」

忘れるとは言わん。だが、お前は過去に囚われ過ぎている、そのままではいずれ過去に飲み込まれるだろう

「リン」

…

「ウハイ」

残された苦しみ、そして滅ぼされたお前の一族の無念…察して余りある。

だが、だからこそお前は復讐など考えず生きなければならん

「リン」

どうしてよ！！

「ウハイ」

何故なら族長の子供、と言うのは生き残りの希望だからだ。

その希望が、生き残った者にとってどれ程の救いになるかお前に分かるか？

「リン」

！ウハイ…でも…女の…しかも子供の私に誰もついて来なかった！！

「ウハイ」

それは滅ぼされたばかりの頃の事だろう？

恐怖に支配され、生き延びるのに必死な者たちには届かない事もある

「リン」

それは…

「ウハイ」

お前が希望と言う事に何の変わりもない。

…生き延びた僅かな連中は思い出し始めるだろう。

だが、お前が死ねばそれで終わりだ。忘れるな、お前は一族の希望と期待を背負っている

ウハイ&リンA

「リン」

ウハイ…この前はありがとう。あなたに言われて目が覚めたわ…。

私に必要なのは、過去を受け入れる努力なの。

だからと言って連中を許す訳じゃないけど

「ウハイ」

ならば、いい

「リン」

こんな事を言うのも変だけど、あなたと話していると父さんと話してるみたい

「ウハイ」

そうか…

「リン」

！そう言えば、私あなたの事何も聞いてなかったわ！自分の事ばかり…何だか恥ずかしい。

「ウハイ」

ふふっ過去の憎しみに囚われて…引き込まれかけていたんだろう。
気にするな

「リン」

ありがとう。ねえ、今度はあなたの話を聞かせて

「ウハイ」

ああ、構わん

「リン」

もっともっと…色々な話がしたいわ

ルイズ&プリシラ（前書き）

ルイズは、プリシラの両親が死んだ事は知らない設定。セシリアは、プリシラの義妹設定。

ルイズ&プリシラ

ルイズ&プリシラ

「ルイズ」

あら？あなたは、もしかカルレオン伯爵の令嬢プリシラ様では？

「プリシラ」

はい？あつリグレ公爵夫人ルイズ様っ…

「ルイズ」

やはりあなたでしたのね。

まさか、このような場所でお会いできるとは思いませんでしたわ。
でも、あなたまで戦いに？

「プリシラ」

はい、微力ながらお手伝いをさせて頂いております

「ルイズ」

でも、エトルリアのご両親はこの事をご存知ですか？

「プリシラ」

…いえ…

「ルイズ」

あなたの身に何かあったらご両親や、まだ本当に小さいけれど、
あなたを慕っている妹のセシリアちゃんが悲しみますわ

「プリシラ」

…はい、ですがエリウッド様や皆さんには、旅の途中助けて頂いた

ご恩もありますので…

「ルイズ」

何か、事情があるのですね。ではプリシラ様、共に戦う者同士、仲良くして下さいね

「プリシラ」

はい…ありがとうございます、こちらこそよろしく願います

ルイズ&プリシラB

「プリシラ」

………

（ルイズ現れる

「ルイズ」

プリシラ様？

「プリシラ」

！ルイズ様…

「ルイズ」

どうかされましたの？気分が優れないようですわ

「プリシラ」

ご心配をおかけして申し訳ありません…。

実は、リキアの…コンウォルの家族の事を思い出していました。兄と、両親を…

「ルイズ」

そうでしたの…ごめんなさい、私ったら余計な事を…

「プリシラ」

いいえ、お気になさらないで下さい…

エトルリアでもルイズ様はパント様と共に、私にとっても優しくして下さいました。

今もこうして気にかけて下さって…本当に感謝しています

「ルイズ」

ふふっどうかそんな事をお気になさらないで。

あら、髪に鳥の小さい羽根が…とって差し上げますわ

「プリシラ」

あっありがとうございます

「ルイズ」

いいですよ。燃えるような赤い…綺麗な髪ですわね

「プリシラ」

そんな…とんでもないです…！

「ルイズ」

ふふっ謙遜しなくてもよろしいですわ。

私ね、もし娘が出来たらこうして髪を梳いたり結ったりするのが夢ですの。

きっと、あなたのお母様もお美しい方なのでしょうね

「プリシラ」

私…お母様の事も、お父様の事も、そして兄の事も少ししか覚えていないのです
…ただ、私が小さい頃、お母様の小さい頃とそっくりだと言われた
事があります

「ルーズ」
きっと、ご両親も、成長されたあなたを見て、お喜びになると思
いますわ

「プリシラ」
ルーズ様…

ジャファル&レイ・ブレンダン&ニノ（前書き）

ジャファル&レイは父息子会話で、レイの母ニノ&義父ブレンダンの会話は、父娘会話です。

ジャファル&レイ・ブレンダン&ニノ

ジャファル&レイC

「ジャファル」

レイ

「レイ」

・・・何？

「ジャファル」

お前は・・・強い。ニノもルウも強いが・・・お前とは、また違う強さだ

「レイ」

・・・

「ジャファル」

もし、俺がいなくなったり、死んだら、あいつらを守ってやってくれ

ジャファル&レイB

「レイ」

父さん、この前の事だけど

「ジャファル」

・・・

「レイ」

死ぬなんて言うなよ、せめて俺達が死ぬまで生きてろよ

「ジャファル」

…それは、遠慮する

「レイ」

ふん、ま、いいけどね

「ジャファル」

レイ・・・

ブレンダン＆二ノ

「ブレンダン」

二ノ、こっちにおいで。

（二ノ現れる）

「二ノ」

父さん！どうしたの？

「ブレンダン」

ほら、こんな物を買ってきてやったぞ。

「二ノ」

プレゼント？でも、どうして？

「ブレンダン」

何だ、娘なのに、理由がいるのか？

「二ノ」

父さん…。

「ブレンダン」

ほら、開けて見なさい。

「二ノ」

うん！・・・わっわっ可愛い服だねっ！！

ありがとう父さんっ大事にとっとく・・・んじゃなくて着るからね
！！

「ブレンダン」

おお、気に入ってくれたなら良かった。ふふっやはり娘と言つのも
いいものだな。

ブレンダン&二ノB

「二ノ」

父さ〜ん。

「ブレンダン」

おや、どうした？

「二ノ」

はい！これあげるね！

「ブレンダン」

おお、これは手編みの額縁だな。ヒースの枝を使ったのか、よく出来てるぞ。

「二ノ」

えへへ、でもね、にいちやん達にほとんど教えてもらって作ったんだよ。

「ブレンダン」

そうか、あいつらと・・・

どうだ、あいつらとは上手くやっているか？いじめられたりしないか？

「二ノ」

全然平気だよ！にいちやん達はよく遊んでくれるし、

ラガルトおじさんは色々なお話聞かせてくれるし、

ウハイのおじさんはよく遠乗りに乗れて行ってくれるし・・・。

「ブレンダン」

そうかそうか、そいつは良かった。二ノはあいつらが好きか？

「二ノ」

うん！大好き！！父さんの事も大好きだからね！

フュリー&マーニャ・フュリー&シゲルド（前書き）

マーニャ&フュリーは、妹フュリーを心配するマーニャの会話。
シゲルド&フュリーの会話は、時間軸は、マーニャ戦死後の会話。

フュリー&マーニャ・フュリー&シゲルド

マーニャ&フュリーC

「マーニャ」

フュリー

「フュリー」

お姉様

「マーニャ」

悲しそうな顔をしてるわね、どうしたの？

「フュリー」

な、何でもありません

「マーニャ」

また、ディートバに何か言われたの？

「フュリー」

ううんっ違う…わ…

「マーニャ」

フュリー、何か悩み事があったら遠慮なく言うのよ。

貴女は抱え込んでしまうタイプだから心配だわ

「フュリー」

ありがとうお姉様、でもお姉様が分かってくれているのが分かるから、

それだけで安心するの

「マーニャ」

当然でしょう、私は貴女の姉さんなのだから

マーニャ & フュリー B

「フュリー」

お姉様、大丈夫？

「マーニャ」

まあフュリー、心配してくれてありがとう

「フュリー」

無理しないでね。お姉様はお強いけれど、色々大変だと思うから

「マーニャ」

ありがとう。貴女も四天馬騎士の一員となってどう？

貴女は真面目だし、面倒見もいいから大丈夫だと思うけど

「フュリー」

ええ、自分では上手くやれていると思う。

「マーニャ」

あの泣き虫だったフュリーが強くなったのね…何だか寂しくなってしまうわ

「フュリー」

お姉様、私、お姉様の事大好きよ。

もっとお姉様や、ラーナ様のお役に立てるようになりたいわ

「マーニャ」

あら、レヴィン様はいいの？

「フュリー」

な、な、何を突然おっしゃるんですか！

「マーニャ」

うふふ、私には分かるのよ。頑張ってねフュリー

「フュリー」

お姉様！

シグルド＆フュリーC

「シグルド」

フュリー、軍には慣れたかな？

「フュリー」

はい、ありがとうございます

「シグルド」

フュリーはシレジア四天馬騎士の一人だそうだね、君を見ていると天馬騎士団のレベルの高さが分かる

「フュリー」

お褒め頂き光栄です。荣誉あるシレジア天馬騎士団の一員として、恥ずかしくない戦いを致します

「シグルド」

君は責任感が強いんだな、だが、あまり無理をしすぎないで欲しい

「フュリー」

はいっシグルド様も、どうかお氣をつけ下さい

「シグルド」

ありがとう、フュリー

シグルド&フュリーB

「シグルド」

シレジアの天馬騎士団長マーニヤ殿は、君のお姉さんだったのか

「フュリー」

はい、マーニヤ姉様は私の目標です。

姉様は小さい頃からいつも私を心配して下さいました

「シグルド」

そうか…いいお姉さんだな

「フュリー」

はっ！戦いの最中に、このような私事を…申し訳ありません

「シグルド」

いいんだよ、君はいつも気を張り詰め過ぎているように思うから

「フュリー」

シグルド様…

シルヴィア&フュリー・セティ&リーン（前書き）

シルヴィア&フュリーは、第四章の会話含め、レヴィンを巡っての会話がメインです。セティ&リーンは、フュリーの息子セティと、シルヴィアの娘リーンのカップリングです。

シルヴィア&フュリー・セティ&リーン

シルヴィア&フュリーC

「フュリー」

あなたがシルヴィアさんですか。

「シルヴィア」

そっただけど〜？誰？

「フュリー」

失礼しました、私はシレジアの天馬騎士、フュリーと申します。

「シルヴィア」

ふ〜ん。で、私に何か用？

「フュリー」

失礼ですが、貴女はレヴィン王子のお知り合いと聞いたのですが？

「シルヴィア」

ええ、そうよ。レヴィンがどうかしたの？

「フュリー」

レヴィン！？あっいえ・・・それでレヴィン王子とはどのような関係で・・・。

「シルヴィア」

恋人よ

「フュリー」

！？

「シルヴィア」

な〜んで、嘘に決まってるでしょ。

でも向こうが私に気があるのは確かね、可愛いつて言われて困ってるの♪

「フユリー」

そ、そうですか。それで他には・・・。

シルヴィア&フユリーB（第四章）

「シルヴィア」

ねえ、ちょっとフユリー。もしかしてあなたレヴィンのこと、好きなの？

「フユリー」

えっ！…私は…そんな…ただ、レヴィン王子はシレジアにとって大切な方だし…

「シルヴィア」

あっそう、じゃあ、私とレヴィンが付き合ってもいいのね

「フユリー」

え、ええ、別に構わないけど…

「シルヴィア」

ホントに？無理してんじゃないの？

「フュリー」

む、無理なんかしてないわ。どうして私が無理なんかしなくちゃいけないの。

「シルヴィア」

べっつに、それならいいんだけど、じゃあ私が貰っちゃうわよ、レヴィンさ……。

「フュリー」

あつ……。でもね、シレジア王妃になる人はラーナ様のような気品がなくてはね……

「シルヴィア」

あたしじゃダメだって言うの！？失礼しちゃうわ！

「フュリー」

え…そんな…

「シルヴィア」

ふんっ、いいわよ！あたし、負けないからねっ

「フュリー」

……。

シルヴィア&フュリーA

「フュリー」

シルヴィアさん

「シルヴィア」

あらフユリー

「フユリー」

その・・・この前は失礼な事を言いました、申し訳ありません

「シルヴィア」

え？ああ、気にしてたの？貴女ってホント、生真面目なのね。
まあいいわ、許してあげる

「フユリー」

ありがとうございます。…私、シルヴィアさんが羨ましくて

「シルヴィア」

へ？羨ましいって、私が？

「フユリー」

ええ

「シルヴィア」

ふーん…。ねえ、その真面目口調何とかならないの？私、肩凝っちゃう。

化粧もちゃんとしてる？そんなんじゃ男は寄って来ないわよ

「フユリー」

そ、そう？

「シルヴィア」

そうよ！仕方無いから私が色々教えてあげるわ、感謝して

「フユリー」

えっ！？

「シルヴィア」

何よ、何か文句でもあるって言うの？

「フユリー」

い、いえ…

セティ&リンC

「リン」

こんにちは、セティ様

「セティ」

君は？

「リン」

リンです

「セティ」

リン、君は踊り子なのか？

「リン」

ふふっ 踊り子に見えませんか？

「セティ」

いや、君が気高い風に包まれているから…ただの踊り子では無い気がするんだ

「リーン」

そんな事言われたの、初めてです。セティ様って不思議な方…

セティ&リーン B

「リーン」

セティ様！私の踊り、どうでした？

「セティ」

とても素敵だよ、君の踊りを見てみると元気が湧いてくる。
いつも楽しそうに踊っているね

「リーン」

うふっ、私、踊るのがとても楽しいんです

「セティ」

君を見ると、父から聞いた踊り子の話を思い出す。
小さい頃、私はその踊り子に憧れていた

「リーン」

まあ、セティ様ったら。それで、どんな踊り子だったのです？

「セティ」

いつも素晴らしい踊りと、明るい笑顔を振りまいて、
皆に元気を与え続けていたそうだな。きっと、君のような女性だと思う

「リーン」

えっ・・・本当ですか・・・セティ様

「セティ」

ああ

「リーン」

セティ様：今度、私の特別な踊りを見せて差し上げますね。
セティ様だけに見て頂きたいんです

セティ&リーンA

「リーン」

セティ様、大丈夫ですか？

「セティ」

ああ、私の事は心配いらない。
だがリーン、この敵は手強い、君は後ろに下がっていなさい

「リーン」

でも・・・

「セティ」

私は、君を失う事が何よりも怖い

「リーン」

私はどこにも行きません。貴方が言うなら踊りをやめてもいい。
だからずっとお側に置いて下さい

「セティ」

ははは、何を言ってる、私が君を離さないよ

「リン」
ああ…セディ様…

ホリン&アイラ・シゲルド&アイラ（前書き）

ホリン&アイラは、第五章の恋人会話になるべく繋がるよう創作しました。同理由で、シゲルド&アイラも創作しました。

ホリン&アイラ・シゲルド&アイラ

ホリン&アイラC（第三章）

「ホリン」

アイラ、この剣を持って行け。

「アイラ」

勇者の剣ではないか。何故私に？お前が自分で使えばいいものを。

「ホリン」

大変な戦いになるという予感がする。

お前のような戦い方をする剣士には剣は幾つあっても邪魔にはなるまい。

それで自分の身を守れ。俺も、お前を助けてやれるとは限らんからな

「アイラ」

ホリン……有難う。大事に使わせて貰う。

ホリン×アイラB

「アイラ」

ホリン、時間が空いているならまた手合わせを頼みたいのだが。

「ホリン」

うむ、いいだろう。

「アイラ」

そうか、助かる。

「ホリン」
手合わせの前に一つ聞こう。お前が強さを求めるのは、シャナンを守る為だったな

「アイラ」
そうだ。それがイザークの為になる。

「ホリン」
ふっシャナンの事ばかり、か。

「アイラ」
！お前がいつも守ってくれている恩を忘れていた訳ではない。感謝している。

お前になら、安心して背中を預けられる・・・そんな気がするしな。

「ホリン」
・・・何か、勘違いしたようだが・・・まあいい。来い、アイラ。

ホリン×アイラA（第五章）
「アイラ」
ホリン、いよいよだな。

「ホリン」
うむ・・・。

「アイラ」
最後に一つだけ聞いておきたい。いいか？

「ホリン」

うん？何だ。

「アイラ」

ホリンは何故私を守ってくれる？何か理由があるのだろうか。

「ホリン」

俺はお前を幼いときから知っている。お前を守ることが俺の全てだ。

「アイラ」

え・・・！？ホリン・・・貴方はまさか・・・。

「ホリン」

俺はソファラの領主の子、そして一人の美しい少女に心を奪われた
バカな男さ・・・。

シグルド&アイラC

「アイラ」

ふんっ

「シグルド」

アイラ、訓練に余念が無いな

「アイラ」

ああ。私は強くあらねばならぬ

「シグルド」

私も見習わなければ。

君の戦いを見ていた。イザーク王家に伝わる流星剣…見事なものだ

「アイラ」

流星剣の他に、月光剣と言うものもある。これは、私は使えないが。他にも様々な剣が伝わっている

「シグルド」

成る程、流石は剣技発祥の地だ

「アイラ」

シグルド殿、何故貴方は私にそんなにも気安いのだ

「シグルド」

何故って、君を信頼しているからさ。

君がいるお陰で、わが軍は大いに助かっている

「アイラ」

… 恩人には恩をもって報いる。私が戦いを勝利に導く。安心して戦え

シグルド & アイラ B (第五章)

「シグルド」

アイラ！？なぜここにいます？シャナンたちと一緒にイザークに行け
と言ったはずだ

「アイラ」

気持ち嬉しいが、それでは私の気がすまない。悪いが最後まで残らせてもらう

「シグルド」

バカな・・・君が行かないでどうする。君はシャナンを守ると誓ったのだろう

「アイラ」

ああ、死んだ兄に約束したからな・・・

だが、シャナンはもう一人でも立派に生きて行ける。私の務めは終わった

「シグルド」

しかし・・・

「アイラ」

イザークには帰る。ただし、この戦いが終わってからだ。そして、シグルドどの・・・その時は貴方も一緒だ

ロイド&ニノ・パント&ロイド（前書き）

ロイド&ニノは兄妹会話です。パント&ロイドは、貴族を狩る黒い牙の一員ロイドと、貴族の代表とも言えるパントとの複雑な会話。

ロイド&ニノ・パント&ロイド

ロイド&ニノC

〔ニノ〕

ロイド兄ちゃん！

〔ロイド〕

ニノ・・・無事でよかった。ケガはしてないか？

〔ニノ〕

うん、全然平気！にいちちゃんは平気？

〔ロイド〕

ああ。

〔ニノ〕

そっかーっ良かった♪

〔ロイド〕

ニノは、一生懸命薪を拾うのを手伝ったり水を汲んだりしているそうだが・・・いい子だな

〔ニノ〕

えへっあたしね、自分出来る事を一生懸命やるって決めたの。

〔ロイド〕

そうか、ふふ・・・随分と成長しているようだ。

〔ニノ〕

ね、にいちゃん。

「ロイド」
ん？

「二ノ」
あのね、にいちゃん達のお母さんの話聞かせて？

「ロイド」
母の？

「二ノ」
うんっサカの人だとしか聞いた事なかったから。

「ロイド」
・・・そうだな、どちらかと言えば俺よりライナスに似ているか。

「二ノ」
え！？じゃあ、ライナスにいちゃんみたいに大きな人だったんだ！！

「ロイド」
くくっライナスほど大きくは無いが、髪の色や目はあいつに似ている。

もっとも、性格はあいつと正反対だな。

「二ノ」
そうなんだ。

「ロイド」
母は、大半のサカ人同様物静かで、穏やかな人だったよ。

〔二ノ〕

そっか。でも父さんの奥さんで、にいちちゃん達のお母さんだから、きつと綺麗で優しくて…いつも側にいてくれる人だったんだろうな。

ロイド&二ノB

〔二ノ〕

ねえ、にいちちゃん…この戦いが終わったらどうするの？

〔ロイド〕

そうだな、黒い牙の事がこつも表沙汰になっちゃったから…まあ、親父のように傭兵でもやって各地を回るさ。

〔二ノ〕

あたし…あたしも連れて行ってくれるよね？

〔ロイド〕

…二ノ、これはお前にも言うておかなくてはならないな。

〔二ノ〕

何？

〔ロイド〕

俺達に賞金がかけているのは知ってるな？

〔二ノ〕

うん…。

「ロイド」

俺達といると言うならば、追っ手からいつも狙われる逃亡生活をする覚悟がいる、

だからまともな生活は出来ないと思え。・・・だが、お前はまだ間に合う。

エリウッドがお前の為にフェレに住む場所を用意すると言っていた。だからそこへ・・・

「二ノ」

やだ！にいちちゃん達がいるなら平気だもん！！にいちちゃん・・・あたしを一人にしないでよ、

安全な場所より家族から引き離される方があたし辛い・・・足手まといにならないから・・・何でもするから連れてって・・・。

「ロイド」

そうか・・・すまない。なら、この件に関してはこれ以上言う必要は無いな。

「二ノ」

・・・我僂言ってごめんなさい。

「ロイド」

いいさ、お前は大切な妹だ・・・。

パント&ロイドC

「パント」

初めまして、君がロイド？

〔ロイド〕

……ああ。エトルリアの魔道軍将が何か？

〔パント〕

パントと言う。

〔ロイド〕

で、俺に何か用か？

〔パント〕

いや、個人的に君と話してみたいと思ったただだよ。

〔ロイド〕

別に、こっちは話す事なんか無いんだがな。

〔パント〕

そんな事はないよ、こんな機会は滅多に無いからね。一つ、質問してもいいだろうか？

〔ロイド〕

何だ。

〔パント〕

君が……君達が何の為に戦うのかをね。

〔ロイド〕

……守りたいただ、自分達の暮らしを。

〔パント〕

ほう、その目的が達成されたら、君は何を得る？

〔ロイド〕

ただの自己満足だ、それ以外の何でもない。

パント&ロイドB

〔パント〕

不躰な質問をするが、君には子供がいるかい？

〔ロイド〕

？ああ、えらく威勢のいいのが一人な。・・・あんたにはいないのか？

〔パント〕

ああ、あいにくね。私も、君の子供のように元気な子が欲しいよ。

（ロイド目を閉じる）

〔ロイド〕

子供はいいものだ・・・。

〔パント〕

ふふっ君が戦うのは、子供の為か？

〔ロイド〕

・・・まだ幼い我が子にも、そしてこれから生まれてくる子にも、

よいものを残してやりたい。

「パント」

そうか……。

「ロイド」

少なくとも、性質の悪い貴族どもに怯える事の無い暮らしをな。

ヘクトル&リリーナ（前書き）

ヘクトルでリリーナ話です。エリニも入ってます。エリウッドとヘクトル支援会話Bを意識しています。

ヘクトル&リリーナ

ヘクトル&リリーナC

「リリーナ」

ねえお父様。お父様はどうやってお母様とお知り合いになったの？

「ヘクトル」

ある日突然、空からペガサスと一緒に降って来たんだ

「リリーナ」

え？降って？

「ヘクトル」

そうだ、思わず天馬ごと受け止めてしまった

「リリーナ」

まあ、すごい。お父様って力持ちですものね。

でも、それで分かったわ。お母様はどうしても教えて下さらなかったの

「ヘクトル」

ははは！フロリーナらしい。随分気にしてたからな

「リリーナ」

くすくす。ねえ、お父様にはお兄様がいらしたのね

「ヘクトル」

ああ、ウーゼルと言ってな、弟の俺が言うのもなんだがすごい男だった

「リリーナ」

お父様は、男の子がお生まれになったらウーゼルにすると行ってらしたそうね。

…男の子が欲しかったの？

「ヘクトル」

まさか、お前でよかったと思っているよ

ヘクトル＆リリーナB

「リリーナ」

お父様とエリウッドおじ様は仲がよろしいのね

「ヘクトル」

ああ、あいつとはもう随分と長い付き合いだからな。

あ！そっぴい変な夢を見た事があるんだよ

「リリーナ」

まあ、どんな夢？

「ヘクトル」

うっぴや、別に…

「リリーナ」

お父様、ロイとおじ様って似てらっしゃるわよね。

髪の色も、目の色もそっくり。ロイって大きくなったらおじ様みたいになるのかしらね？

「ヘクトル」

そうだな…あ、そうだリリーナ、フロリーナの所へ先に行ってくれるか？

「リリーナ」

？くすくす、変なお父様。分かったわ。

（リリーナ消える）

「ヘクトル」

あの夢は予知夢だったのか・・・？だが、娘はまだやらんからな

ラガルト&ゲイル・ゲイル&ミレディ（前書き）

ラガルトとゲイルの会話は親子設定で、ゲイルとミレディは、ラガルトとゲイルの会話を意識して作りました。

ラガルト&ゲイル・ゲイル&ミレディ

ラガルト&ゲイルC

「ラガルト」

おや、あんたは確か、ベルン竜騎士の

「ゲイル」

ゲイルだ。…最近、お前の顔をよく見る。成る程、ゼフィール王の雇った密偵と言うところか

「ラガルト」

そんなとこだ。俺はラガルト。

敵の情報を手に入れたり都市の状態をさぐったり…いわゆる「裏の仕事」ってやつだな。

まあ、同じ主に仕えるもの同士、仲良くやろうぜ

「ゲイル」

自分でバラすか？…変わってるな

ラガルト&ゲイルB

「ラガルト」

ゲイル、あんたの活躍を見てたぜ。お前さんは立派だね。お前さんみたいないい子がいて、両親もさぞかし鼻が高いだろう

「ゲイル」

…父は、知らん。母も、俺が幼い頃に死んだと思う

「ラガルト」

！そりゃ、悪い事を言ったな。…会いたいかな？

「ゲイル」

いや

「ラガルト」

そうか。ま、探し物を見つけるのは得意だ、何なら話だけでも聞いてやるけど？

「ゲイル」

ふっあんだ、本当に変わってるな…なら、聞くだけ聞いてくれ。母の名はアイシャ。俺と同じ青髪の…父の事は何も知らん、母から聞いた話では【疾風】と言う言葉に関係があるらしい。

…手がかかりと言っても、それだけだ

「ラガルト」

！…そうか

「ゲイル」

じゃあ、俺は行く。またな、あんたも無事でいろよ

（ゲイル消える）

「ラガルト」

…そうだったのか、アイシャ…

ゲイル&ミレディC

「ミレディ」

ゲイル！

「ゲイル」

ミレディか、どうした

「ミレディ」

ちょっと話したかったのよ。いいかしら？

「ゲイル」

ああ、しかしお前とこうして話すのも久し振りだな

「ミレディ」

ええ。あなたがマードック將軍の直属の竜騎士になってから、
そして私がギネヴィア姫の護衛に任じられてからお互い本当に忙し
かったもの

「ゲイル」

ふっだが、こうしてお前と話せて良かった。そうだ、ツァイスは元
気か？

「ミレディ」

ええ、もちろん。『最近ゲイルさんに会えないな』って、淋しがっ
ていたわ。

あの子はね、あなたが目標なんだそうよ

ゲイル&ミレディ B

「ミレディ」

ねえ、ゲイル。あなたのご家族の話聞いた事が無かったわ。
聞いてもいい？ 一体どんな方なのかしら？

「ゲイル」

両親か…お前は、どう思う？

「ミレディ」

そうね、貴方のお父様は強くて、それでいて真面目で…

お母様はきつと凜としていてお優しい方だわ。で、本当はどうなの？

「ゲイル」

…ミレディ、俺は教会で育った

「ミレディ」

えっ…？

「ゲイル」

だから、俺を生んだ人の事は少しだけしか知らない…その相手も。
これは、口に出して言うのはお前が初めてだ

「ミレディ」

そんな…

「ゲイル」

突然このような話をして…すまないと思っている。

ただ、お前には知っておいて欲しかった。それだけだ

「ミレディ」

…

「ゲイル」

そんな顔をするなミレディ。

勘違いしないで欲しいが、今も昔も、俺は十分幸せなんだからな。それにずっと…お前に救われ続けている

「ミレディ」

ゲイル…ええ、話してくれてありがとう

ゲイル&ミレディA

「ミレディ」

ご両親に、会いたい？

「ゲイル」

ああ、そうだな…

「ミレディ」

当てはあるの？

「ゲイル」

無い訳ではない。母の名はアイシャ。

俺と同じ青髪の…顔はおぼろげに覚えている。だが、恐らく死んだのだと思う

「ミレディ」

思う？

「ゲイル」

ああ。俺はずっと教会にいて、母はよく会いに来てくれた。

…だが、突然来なくなってしまった。それが長く続いた時…幼心に死んだのだと感じた

「ミレディ」

そうだったの…

「ゲイル」

俺の、名前の意味を知っているか？

「ミレディ」

？ええ、もちろん。『ゲイル』…激しい嵐のような、たちまちのうちに起こる強い風…

『疾風』の事でしょう？それが何か？

「ゲイル」

母が、父にちなんでつけたらしい。何を意味しているのかは分からないが

「ミレディ」

！もしかするとあなたのお父様は…

「ゲイル」

ああ、確証はないが、父は生きていると思う

「ミレディ」

きっと見つかるわ…きっと…それに何だか、あなたが知らない内に会っている気がするの

「ゲイル」

ミレディ…

ヒュウ&バートル（前書き）

カナスの息子、ヒュウとバートルの会話（封印にて） 烈火のカナス
とバートルの支援会話の流れを受けて創作。

ヒュウ&バトル

ヒュウ&バトルC

「バトル」

ぬうつ！貴様っ！

「ヒュウ」

なっ何だよ？

「バトル」

その格好・・・さては、魔道の使い手だな。

「ヒュウ」

あ、ああ。それが何だってんだよ？

「バトル」

やはりか。もしやお主、本を持ってるのではないか？

「ヒュウ」

そりゃ、魔道書ならな。

「バトル」

そうか。ならばいい。俺は少し素振りをしてくるぞ。

（バトル消える）

「ヒュウ」

？一体何だったんだ？

ヒュウ&バトルB

「バトル」

うーむ・・・うーむ・・・。

「ヒュウ」

おーい、おっさん？

「バトル」

む、また会ったな。魔法使い。

「ヒュウ」

ああ。ところでさっき何うんうんうなってたんだよ、腹でも壊したのか？

「バトル」

馬鹿もんが！貴様の事で悩んでおったのだ。

「ヒュウ」

へ？

「バトル」

貴様を見ると、不思議と懐かしい気持ちになり、

誰かを思い出しかける気がするのだが・・・うーむ・・・。

「ヒュウ」

誰か？誰かって誰だよ？

「バトル」

それが思い出せないから、悩んでおるのだ。

「ヒュウ」

そりゃそうだ。まあ、周りに気をつけて悩めよ、おっさん。

ヒュウ&バトルA

「バトル」

おお、また会ったな。魔法使い。

「ヒュウ」

ようっ悩みは解決したか？

「バトル」

うむ、思い出したぞ！

「ヒュウ」

で、誰を思い出したんだよ？

「バトル」

名前は思い出せないのだが、
知を鍛えるべく常に勉強に励んでいた男で、
闇魔法なるものの使い手だ。

「ヒュウ」

へへえ。

「バトル」

おれはこの力を鍛える身。そしてその男は知を鍛える身だった。

だが道は違えども、互いの道を知るのは悪いことでは無いと、互いの道についての理解を深めたものだ。

「ヒュウ」

成る程、いい話じゃねーか。

「バトル」

だろう？しかし・・・髪の色や目の色といい、

見れば見る程貴様に似ている気がしないでもない。

「ヒュウ」

ふーん、もしかしたらそれ、俺の親父かもしんねえな。

マシュー&二ノ（前書き）

恋人であるレイラを殺した組織【黒い牙】を憎むマシューと、黒い牙の首領ブレンダンの義娘二ノの会話

マシュー&二ノ

マシュー&二ノC

「二ノ」

お兄さんこんにちは！初めまして！あたし…

「マシュー」

知ってる。二ノだね？

「二ノ」

わっ名前を覚えてくれてるなんて嬉しいな。お兄さんは何て言うの？

「マシュー」

マシュー

「二ノ」

マシューさんかぁ、宜しくお願いします！

「マシュー」

こちらこそ。ところで君は、黒い牙にいたそうだけど？

「二ノ」

うん、そうだよ

「マシュー」

へえ、黒い牙って、どんな所だった？

「二ノ」

黒い牙に興味あるの？

「マシュー」

少しね。教えてもらっていいかな？

「二ノ」

うん、いいよ！あのね、黒い牙の首領はブレンダンって言って、血は繋がってないけどあたしのお父さんでね…

マシュー&二ノB

「二ノ」

マシューさんで、あたしを見ると時々悲しそうな顔をするよね。どうして？

「マシュー」

そんな顔をしていたかな？じゃあ、ちょっと俺の話を聞いてくれるか？

俺には、ものすごく大切な人がいたんだ

「二ノ」

もしかして、マシューさんの好きな人？

「マシュー」

ああ…もう、死んでしまったけどね。

「二ノ」

あつごめんなさい！！

「マシュー」

いいんだ。…不思議な事に、君を見ているとその人を思い出すんだよ。

歳も、顔貌も全然違うのにね

「二ノ」

そうだったんだ…ごめんなさい

「マシュー」

いや、謝る事じゃない。君が謝る事じゃ…ないんだよ

マシュー&二ノA

「二ノ」

あ、マシューさん…

（二ノ下がる）

「マシュー」

どうした？

「二ノ」

だ、だって…私を見ると、マシューさん、

その人の事を思い出して悲しくなっちゃうんでしょう？

だから、マシューさんの目になるべく映らないようにしようと思っ
て…

「マシュー」

二ノ…違う、違うんだ。一つ聞いてもいいかな？君は、大事な人を
奪った人間を許すか？

「二ノ」

そんなの、絶対に許さないよ！許せる訳無いよ……！
もしかして、マシユーさんの大切な人は…そんな風に死んだの？

「マシユー」

ああ…俺は、殺した奴が憎い…もしそいつが目の前に現れたら、どうしたらいいと思う？

「二ノ」

…あたしなら、殺したいって思う。それは誰だってそうだと思う

「マシユー」

そうか…なら、質問を変えようか。

死んだ人は、自分を殺した人間を殺して欲しいと思っていると思うかい？

「二ノ」

えっとね、それは違うと思うよ。全然そう思っていないって訳じゃないと思うけど…

「マシユー」

どう言う事かな？

「二ノ」

だって、マシユーさんの大切な人も、
マシユーさんが幸せになってくれるのを祈ってるに決まってるよ。
悲しんで殺す事だけを考えてる姿なんて…私なら、見たくないもん…

「マシユー」

…
ありがとう、
ニーノ

レスター＆ラナ（前書き）

兄妹会話です。セリスの話題ばかりですが…ラナ恋人無しEDに繋がる話です。

レスター＆ラナ

レスター＆ラナC（第六章）

「レスター」

ラナ！？おまえまで戦いに加わっているのか？

「ラナ」

ええ、レスター兄様、セリス様が心配だから・・・。

「レスター」

そうか、やっぱりな・・・でも気を付けてくれよ。

おまえにもしもの事でもあれば母上が悲しまれる。

「ラナ」

ええ、でもね、兄様、エーディン母さまは言われました。

私達はイザークの人々に恩があるから、出来る事はしましうって。

「レスター」

ああ、この国の人達が助けてくれなかったら俺たちは生きて来れなかった。

・・・それで、母上は？

「ラナ」

ティルナノグの修道院で働いておられます。

「レスター」

そうか・・・ラナ、母上の為にも、そしてまだ見ぬ父上の為にも俺たちは頑張ろう。

そしていつの日かきっと母上の故郷、ユングヴィに帰るんだ

「ラナ」

はい、レスター兄様

レスター＆ラナB

「ラナ」

ああ…

「レスター」

ラナ？ため息なんてついて、どうしたんだ？

「ラナ」

レスター兄様、セリス様は最近…いえ、何でもありません

「レスター」

何でも無いって顔じゃないぜ。心配するな、セリス様はお前を大事に思ってたさってる

「ラナ」

そうでしょうか…

「レスター」

不安になるのも無理は無いがな、こればかりはお前が頑張るしかないんだ

「ラナ」

はい、そうですね…何だか強くなれた気がします。ありがとうございます、兄様

「レスター」

そうそう、その笑顔だ

レスター＆ラナA

「ラナ」

・・・

「レスター」

…ラナ、そう怒るな

「ラナ」

兄様、どうかされましたか？私は怒ってなどいません

「レスター」

嘘をつくな、セリス様の事だろ。まさか、こんな事になるとはな

「ラナ」

もういいんです、だって仕方がない事だもの

「レスター」

ラナ、もう少しだけ頑張ろう。

全て終わったら、俺と一緒に母上を迎えに行つて、

ユングヴィの復興や、父上の国、ヴェルダンの復興をする。やる事はたくさんあるんだ

「ラナ」

はい、レスター兄様

ルトガー&スー（前書き）

故郷を滅ぼしたベルンを憎むルトガーとスーの会話です。

ルトガー&スー

ルトガー&スーC

「ルトガー」

お前が・・・クトラの『灰色の狼』の孫娘・・・。

「スー」

あなたは・・・草原の民？

「ルトガー」

・・・。

「スー」

名前は？

「ルトガー」

ルトガー・・・ブルガルにいた。

「スー」

そうだったの・・・私はスー。あなたは・・・ベルンが憎い？

「ルトガー」

ああ。

「スー」

そう・・・なら、私はあなたの味方。

ルトガー＆スーB

「スー」

ルトガー。

「ルトガー」

・・・何だ。

「スー」

今のあなたの「感じ」とても鋭くて恐い・・・何を考えていたの？

「ルトガー」

・・・ベルンと自分と・・・父の事だ。

「スー」

そう・・・お父様の名を聞いてもいい？

「ルトガー」

・・・ライナス。

「スー」

ライナス・・・シンから聞いた事があるわ。

「ルトガー」

・・・。

「スー」

シンは私の同族。・・・シンの父ウハイ様の友人の名の中に、ライナスと言う名があった。

でも、詳しい事は知らない。

「ルトガー」

そうか・・・。

「スー」

でもルトガー、あまり気を張り詰めないで、たまには天や地の声に耳を傾けて。

そのままでは過去に引き込まれてしまうわ。

「ルトガー」

・・・。

ルトガー&スーA

「ルトガー」

・・・スー。

「スー」

ルトガー、どうしたの？。

「ルトガー」

辛そうに見えたからな。・・・何を考えていた？

「スー」

ベルンと、自分と、母の事・・・でも私、そんな顔はしてないわ。

「ルトガー」

以前、お前は俺に「天」や「地」の「声」に耳を傾けるようにしろと言った

「スー」

？ええ・・・

「ルトガー」

だが、今のお前にも同じ事が言える気がする。

「スー」

・・・私の母・・・リンデイスも今の私と同じような目に遭ったの。
一族を殺されて・・・でも、母はその気持ちを乗り越えた。

だから、お母様を想いどうすべきか考えていた・・・でも、分からない。

「ルトガー」

そうか・・・だが、お前に言われて俺は気がつき、心が少し軽くな
った気がした。

・・・お前も、そうならいい。

「スー」

そう・・・ルトガー。

「ルトガー」

・・・何だ。

「スー」

ありがとう。

レヴィン&フュリー（前書き）

支援会話B以外は、ゲーム中の会話です。CとAの繋ぎになるようにしました

レヴィン&フュリー

レヴィン&フュリーC

「レヴィン」

フュリー。母上の事は大体分かったが、マーニヤはどうだ、元気だったか？

「フュリー」

お姉様ですか？はい、少なくとも私が国を出る時は元気でした。きっと、今もラーナ様をお側で支えている筈です。

お姉様も、レヴィン様の事はとても心配されていました。

「レヴィン」

マーニヤが？お前、今嘘ついただろ。

「フュリー」

えっ・・・な、何故そう思うのです？

「レヴィン」

何となくさ。

「フュリー」

王子、そのつす、すみません、本当の事を申し上げますと

お姉様は王子の事は全く心配しておりませんでした。

私を含めた部下達が身を案じて慌て続ける中、

不思議な位落ち着いていて、王子の無事を確信しておられました。

「レヴィン」

そうか、やっぱりな。

「フュリー」

申し訳ありません!!

「レヴィン」

いや気にするな。・・・ふっさすがはマーニヤ。

「フュリー」

?王子・・・?

レヴィン×フュリーB（第四章）

「フュリー」

レヴィン様…

「レヴィン」

…フュリー…すまない、どうか許してくれ…

「フュリー」

レヴィン様はマーニヤ姉様の事が…

「レヴィン」

ああ…

「フュリー」

やっぱり…ごめんなさい、私何も知らなくて…

「レヴィン」

フュリー違うんだ。確かに若いころはマーニヤに憧れていた。でも

今は違う、今はお前が…

「フュリー」

え！？…

「レヴィン」

おまえが好きだ…

レヴィン×フュリーA（第五章）

「フュリー」

レヴィン様、いよいよですね

「レヴィン」

そうだな、でもフュリー、約束は守れよ

「フュリー」

ええ、必ず生きてシレジアに帰る、そうですね

「レヴィン」

ああ、俺は死なない。だからフュリーも絶対死ぬな！

「フュリー」

はい！約束します。やっと、幼いときからの夢が叶ったのに戦争で死ぬなんて嫌です！

私はレヴィン様のお側を離れません

「レヴィン」

シレジアには母上が待っている。母上は俺よりフュリーの帰りを楽

しみにしているか

「フュリー」

はい、ラーナ様…いえ、お義母様には幸せになって頂かなければ…

イグレーヌ&クラリーネ（前書き）

パントとルーズに可愛がられていたイグレーヌと、パント夫婦の娘クラリーネの邂逅

イグレーヌ&クラリーネ

クラリーネ&イグレーヌC

「クラリーネ」

あなたがイグレーヌさん？

「イグレーヌ」

ええ、そうだけど。あなたは？

「クラリーネ」

私はリグレ公爵の娘、クラリーネですわ

「イグレーヌ」

では、パントさんとルーズさんの？

「クラリーネ」

ええ！私、小さい頃からお話でよく聞いていまして、
いつかお会い出来たらいいなと思っていましたの

「イグレーヌ」

まあ、どんな話かしら

「クラリーネ」

イグレーヌさんのお父上、ホークアイ様の話や、イグレーヌさんの
話、アトス様の話ですわ

ナバタの守り手はあの熱砂の中、侵略者と戦うのが役目なのですわ

「イグレーヌ」

あら、よくご存知ね

「クラリーネ」

お父様やお母様に、何度も聞かせて頂きましたもの。とてもお強い
のね

「イグレーヌ」

強くないとやっていけない役目だから。だからこそ、この役目に誇
りを持っているわ

クラリーネ&イグレーヌB

「クラリーネ」

私の敬愛するクレインお兄様もお母様も弓を使いますの。

それで弓の事なら多少知っているのですけれど、イグレーヌさんの
弓の腕、お見事ですわ

「イグレーヌ」

そう？この弓は、あなたのお母様から頂いた私の宝物なの

「クラリーネ」

まあっ！そう言えばお母様も、イグレーヌさんとお揃いの弓を買っ
たと言っていましたわ。

…お父様とお母様は、砂漠に何をしにいらしたのでしょうか？

「イグレーヌ」

遺跡の調査をしに来ていたと聞いているわ。それとは別に絵画もお
好きなようね。

絵画は歴史と、民族の移動を伝えるメッセージだから

「クラリーネ」

私も、砂漠を通る時に幾つか拝見しましたけど、砂漠の民の絵画は単純な線で動物の特徴をよく捉えてある見事なものでしたわ。

でも、砂漠に動物はいませんが

「イグレーヌ」

ふふっ昔はね、砂漠にも川や湖がたくさんあったのよ

クラリーネ&イグレーヌA

「クラリーネ」

イグレーヌさん！お待ち下さいな

「イグレーヌ」

あら、どうしたの？

「クラリーネ」

お怪我をされていないか心配になりましたの

「イグレーヌ」

ありがとう。…そう言えば、ご両親はあなたが戦いに参加している事をご存知なのかしら？

「クラリーネ」

それは…ええと、無事でいる事は知らせましたの

「イグレーヌ」

そう。きっと、ご両親はあなたがなくて寂しがってるでしょうね。

ぶじに、そして早くお兄さんと一緒に帰ってあげないと

「クラリーネ」

もちろんですわ！あの、この戦いが終わったら私やお兄様と一緒に一度エトルリアへいらしてはいいかが？

「イグレーヌ」

気持ちは嬉しいけれど、

私はこの戦いが終わったら、今度は本来の使命を全うしなくてはいいけないわ

「クラリーネ」

そうですね…あの、これからも仲良くして頂けると嬉しいのですけれど

「イグレーヌ」

ええ、もちろんよ

アレス&ナンナ（前書き）

アレナン大好きなんです~~~~~

アレス&ナンナ

アレス&ナンナC（第八章）

「ナンナ」

あなたがアレス？

「アレス」

ああ、そうだが、俺に何か用か？

「ナンナ」

あなたはエルトシャン王の子とききましたが本当ですか？

「アレス」

そうだが、なぜそんな事をきく？

「ナンナ」

ああ、やっぱり本当でしたか！私はナンナ、エルトシャン王の妹。
ラケシスの子です！

「アレス」

な、なんだと！？おば上の子だと言っのか！

「ナンナ」

はい、母はあなたの事をずっと心配していました。
レンスターに来たのもあなたを捜すためだったようです。

「アレス」

俺の父上はアグストリアが戦乱になることを予期されて、
病弱の母と幼い俺をレンスターの実家に預けられたそうだ。

しかしそのレンスターも帝国軍に侵略されて戦火の中で母上は死んだ・・・

「ナンナ」

それでジャバローに？

「アレス」

ああ、ヤツは俺をひろって育ててくれた。

俺はヤツの傭兵軍団と共に世界をわたり歩いてきたのだ。

「ナンナ」

だから会えなかったのね…アレス、ラケシス母様から預かっていた物があるの

「アレス」

うん？・・・こ、これは？・・・父上の！？

「ナンナ」

そう、エルトシャン王からあなたにあてた手紙です。

「アレス」

！……………な、なんと…………。

「ナンナ」

ねっ、わかったでしょう？エルトシャン王はシグルド様を最後まで信頼されていたのよ。

お二人は真の親友だったと思う

「アレス」

そうだったのか…俺は…間違っていたようだ…

「ナンナ」

アレス、セリス様を守ってあげて、貴方の力が必要なの！

「アレス」

…分かったよナンナ。お前には剣を教えてやろう、俺の力、とくと見るがいい。

アレス&ナンナB

「アレス」

ナンナ、少しいいか？

「ナンナ」

あらアレス、どうしたの？この前は剣の指導をありがとう、リーフ様やお父様にも上達したと褒められたの。

「アレス」

そうか、あれぐらいいつでも相手をしてやろう。

「ナンナ」

本当？では、またお願いするわね。

「アレス」

ああ。それでお前は、その・・・リーフ王子と親しいのか？一緒にいる姿をよく見るが。

「ナンナ」

まあ、突然どうしたって言うの、変な事を考えないで。リーフ王子

と私はただの幼馴染よ。

「アレス」

そっそうか、すまない。

「ナンナ」

あなたこそ、あの人とうなの？

よく話している姿を見かけるわ、随分と親しいみたいだけど。

「アレス」

彼女は、信頼出来る友人だ。話していると落ち着く

「ナンナ」

そう・・・ところで、用はそれだけかしら？

「アレス」

いや。ナンナはアグストリアの事をどれぐらい知っている？

俺は、話に聞くだけで一度も足を踏み入れた事は無い

「ナンナ」

そうね、私も無いわ

「アレス」

人から聞く事も大事だが、どう言う所なのか自分達で話すのも無駄ではないだろう。

それにアグストリアを再建するにあたって

どんな国にするのが民にとって一番いいのかも考えたい。

アグストリアをどう言う国にしたいのか、お前の意見が聞きたいのだ。

だから普段なるべく近くにるようにしないか？その方が話しや

すいだろう。

「ナンナ」

ふふっ、名案だね。そうね、そうしましょう。

アレス&ナンナA（最終章）

「ナンナ」

アレス、むちゃはだめよ。

貴方にはアグストリアの再建という大きな仕事が残っているのだから。

「アレス」

ああ、わかつているさ、こんな戦いで死ぬつもりはない。

俺は父上の遺志を継いでアグストリアを立派な国にしてみせる。

「ナンナ」

よかった、それでこそアレスだね。

エルトシャン王もラケシス母様もきっとお喜んでくれると思います。

「アレス」

だがナンナ、俺一人ではダメだ、お前にも手伝ってほしい。

「ナンナ」

ええ、もちろんよ。私は貴方と生きて行くと決めた、母のような間違いはしないわ。

「アレス」

叔母上は我が父エルトシャンを愛しておられたのだろうか？…

「ナンナ」

ええ、異母兄弟ですもの、別に不思議は無いでしょう

「アレス」

そう言えば俺達は従兄妹だったな

「ナンナ」

ふふっ、もっと不思議はないでしょう

ノア&エキドナ（前書き）

ロイ軍のスカウトウーマンエキドナと、ノアの意外な接点（捏造）

ノア&エキドナ

ノア&エキドナC

「エキドナ」

なあ、あんた。あんた、イリアの傭兵だろ？

イリアの傭兵は『傭兵として一度かわした契約は決して裏切らない』
そうだが、本当かい？

「ノア」

ああ。それが何か？

「エキドナ」

近々、西方に村をつくる計画があるんだ。

で、村で暮らすみんなを移動させる際に守って欲しいんだけどね

「ノア」

申し訳ないが、今はこの軍と契約を結んでいる。
だが、その事について話するのは構わない

「エキドナ」

本当かい？ありがたいね

ノア&エキドナB

「エキドナ」

名前を聞いてなかったね。あたしはエキドナ

「ノア」

私はノア。それでエキドナ、村人や物資をどう移動させようと思っている？

「エキドナ」

それがねえ、やっぱり船での移動を考えているんだよ

「ノア」

船か、それがいいだろうな

「エキドナ」

船は苦手かい？

「ノア」

いや、俺は構わない。父に連れられて、小さい頃から船に何度か乗っていた

「エキドナ」

ほう、なら船が使えるのか？

「ノア」

多少の事は分かるが、一人では無理だな

「エキドナ」

あんたの親父さんは船乗りかい？

「ノア」

まあ、似たようなもので、昔海賊をしていたと聞いた事がある

「エキドナ」

へえ、なら親父さんに話つけてもらえないかい？是非力を貸して欲

しいんだが

「ノア」

…申し訳ないが、貿易業に出ている最中だ。長い時は何年も帰って来ない

ノア&エキドナA

「エキドナ」

あんたの親父さんは元海賊って言ってたね。母親も？

「ノア」

いや、母はイリアの天馬騎士だ。海賊に興味が？

「エキドナ」

ああ。親父さんはどこの海賊団だったんだい？

「ノア」

ファーガス海賊団、と言っ言葉を聞いた事は？

「エキドナ」

！もちろんあるよ

「ノア」

父は昔、その船に乗っていたと聞いた事がある。
だが父は…未だに記憶がはっきりしない所もたくさんあると言っていた

「エキドナ」

ほう、親父の名前は？

「ノア」

ダン…いや、ダーツと言う

「エキドナ」

ダーツ？へへえ、そりゃ懐かしい名前を聞いたよ。
ならダーツは生きてた、って事だねっ

「ノア」

？ああ

「エキドナ」

ファーガスってのはあたしのじいさんでさ、
じいさんは昔、海賊同士のいざこざがあって危機一髪のを、
ダーツって奴がかばってくれたおかげで命拾いしたらしいんだよ

「ノア」

え！？

「エキドナ」

けどね、じいさんの代わりにそいつが傷を負って海に沈んじまっ
たさ、

散々探したけど見つからなくて、結局死んだんだろうって事になっ
たらしい。

じいさんはそいつの事をえらく悔やんでたよ

「ノア」

そうか…

「エキドナ」

村づくりの事だけど、これも何かの縁だろうからさ、気が向いたら
宜しく頼むよ

「ノア」

ああ、考えておく

アゼル&ティルテュ（前書き）

エスニヤを会話中に出したかっただけだったりします。ちなみにアゼルティル大好きなんです~~~~~！

アゼル&ティルテュ

アゼル&ティルテュC（第四章）

「ティルテュ」

アゼル、待つてよ。

「アゼル」

ティルテュか、どうしたんだい？

「ティルテュ」

少し聞いて欲しい事があるの。

「アゼル」

えっ？ボクにかい？

「ティルテュ」

うん、いいでしょ。貴方とは幼馴染だし、他にこんな話ができる人なんていないもの。

「アゼル」

なんか深刻そうだな。いいよ、ボクで力になれることなら話してみなよ

「ティルテュ」

うん…私ね、何も考えなくてクロード様についてきちゃったけど、ほんとにこれで良かったのかな…

「アゼル」

どうしてそんな事を思っただい？

「ティルテュ」

だって、皆私に気を遣ってるもの。私の前では、お父様の事は話さないし…

「アゼル」

そうか・・・、それで寂しいんだな。でも、皆君の事が好きなんだよ。

ただ、どう接していいのかわからないから困っているんだと思う。

まあ、その内に慣れるさ、大丈夫だよ

「ティルテュ」

うん…そうよね…ありがとうアゼル、何だか元気が出てきちゃった

「アゼル」

ははは、ティルテュは元気が一番さ。

寂しい時はいつでもボクが相手になるから遠慮無しに言ってくれよ

「ティルテュ」

うん…ありがと

アゼル×ティルテュB

「アゼル」

ティルテュ、調子はどう？何か困…

「ティルテュ」

アゼル！この前はありがと、貴方の言った通り、皆いい人達ね。ちよつと私の考え過ぎだったみたい。

「アゼル」

そうか。それで、他に困ったりはして無い？ボクで良ければ何でも聞くから

「ティルテュ」

ありがと、今は全然平気！！

「アゼル」

そうか…

「ティルテュ」

あれ？何か元気ない？どうしたの？

「アゼル」

何でも無いよ。あ、君がいつもつけているそのペンダント、綺麗だね。

「ティルテュ」

えへへ、そう？実はね、私と妹のエスニヤとお揃いなの。

でも二人共お揃いの物をお互いあげようとして、同じ物を二つずつ買っちゃったの

「アゼル」

ははは、仲がいい君達らしいね。

「ティルテュ」

あ！そーだ、アゼルに一つあげる

「アゼル」

えっ 大事な物だろう？ いいのかい？

「ティルテュ」

うん！話を聞いてくれたお礼

「アゼル」

ありがとうティルテュ、大事にするよ

アゼル×ティルテュA（第五章）

「ティルテュ」

アゼル、行かないで！

「アゼル」

ティルテュ、約束だろ。きみはシレジアに行け、ボクも後からきつ
と行く

「ティルテュ」

でも…

「アゼル」

君はフリージ軍とは戦えない。

それともティルテュは自分の父親を本当に殺せると思っているのか！

「ティルテュ」

それは…出来ないわ…

「アゼル」

それでいいんだよ。平気で父親を殺せるような人ならボクは愛して

はいない。

ティルテュ、子供達を頼んだよ

〔ティルテュ〕

アゼル！！

ヘクトル&レイラ（前書き）

さり氣にこのカップリング（ヘクトルの片思い？）も好きです！

ヘクトル&レイラ

ヘクトル&レイラC

「ヘクトル」

レイラ！

（レイラ現れる）

「レイラ」

ヘクトル様・・・どうされました？

「ヘクトル」

いや、姿を見かけなかったからな。

「レイラ」

ちゃんとお側におりますよ。

狙われている身で不安だとは思いますが、必ずお守りしますので。

「ヘクトル」

いや違う、そう言う不安じゃねえ。

「レイラ」

そうなのですか・・・？

「ヘクトル」

姿が見えねーからお前に何かあったんじゃないかと思ってな。

「レイラ」

そうでしたか・・・この任についてからの度重なるお気遣い、あり

がとうございます。

「ヘクトル」

かつ勘違いすんなよ？お前は兄上の密偵だから・・・そ、そうだ確認の為だ。」

「レイラ」

はい、ごもつともです。ですが、極力お控え下さい。
万が一を考えて、なるべく人目につかないようにしたいのです。

「ヘクトル」

そっか、悪いな、結構頻繁に呼んじまってたし。
でも、呼んだらちゃんと出てきてくれるんだな。

「レイラ」

はい、もちろんですよ。

「ヘクトル」

お前が俺の側にいるのは、やっぱり兄上の命令だよな。

「レイラ」

はい。ウーゼル様よりヘクトル様の身の護衛を仰せつかっております。それが何か？

「ヘクトル」

いや、別に何でもねえよ。

ヘクトル&レイラ B

「ヘクトル」

レイラ。

（レイラ現れる

「レイラ」

はい？

「ヘクトル」

お前、オスティアの密偵になってどれくらいになる？

「レイラ」

はい、マシューとほぼ同期ですので数年になりますね。

「ヘクトル」

そっか。そーいや、お前は普段オスティアの宮廷楽師として通っていたな。

「レイラ」

はい。

「ヘクトル」

この戦いでは剣士として活躍してるが、それは大丈夫なのか？

「レイラ」

私の楽師姿を見ている方は、武器を扱う姿を若干不審に思う所もあるようです。

ただ、楽器と共に武器の扱い方を習った事があり、

扱えると言う事で剣士としてこちらの戦いに参加しておりますので、どうかそのように。

「ヘクトル」

ああ、もちろんだ。

しかし懐かしいな、お前の所にはよく演奏聴かせてくれつつ遊びに行ったよな。

「レイラ」

ええ。ヘクトル様は、よくねぎらいの言葉をかけて下さいましたね。

「ヘクトル」

お前が密偵だとは思わなかった、紹介された時やられたと思ったぜ。

「レイラ」

くすくす、そう言うものですから。

「ヘクトル」

この戦いが終わって、オスティアに戻ったらまた聴かせてくれよ、お前の演奏はその・・・好きだからな。この戦いが終わるまで無事でいるんだぞ、いいな？

「レイラ」

はい、ありがとうございます。

アーサー&ティニー（前書き）

兄妹会話です。ペンダントの由来と、過去のこと。

アーサー&ティニー

アーサー&ティニーC

「ティニー」

兄様、またこのペンダントを見ているのね。

「アーサー」

ああ、これを見ていると不思議と落ち着くんだ。

寂しい時はいつもこれを見てた。それに君が分かったのもこれのお陰だからね。

「ティニー」

はい、兄様には本当に感謝しています。兄様が来て下さらなかったら、私は…

「アーサー」

ティニー、君は俺の事を知らなかったんだね。

「ティニー」

ええ・・・聞いた事が無かったの。でも何故なのか今なら分かるわ、私に話して、うっかり私の口からブルーム伯父様の耳に入ってしまったら

大変ですもの、兄様に危険が及ぶのを心配したのね。

「アーサー」

ああ、俺でもきつとそうするだろう。・・・母さん・・・。

アーサー&ティニーB

「アーサー」

なあティニー、君は父さんの事を知っているかい？

「ティニー」

ええ、ほんの少しなら・・・名前はアゼルです、ヴェルトマーの・・・。

「アーサー」

もしかして、皇帝の弟の？

「ティニー」

ええ。でも、残念ながらバーハラの戦いで亡くなったと聞きました。ただお父様も、このペンダントと同じ物を身につけていたと母様から聞きました。

「アーサー」

そうだったのか。ならきつと、これは父さんが付けていた物なんだ・・・。

「ティニー」

ええ、きつとそうですね。

何だか今も、このペンダントを通してティルテュ母様やアゼルお父様が

見守ってくれているような気がします。

アーサー&ティニーA（最終章）

「アーサー」

ティニー、もうすぐ母さんの祖国、フリージだな。

「ティニー」

うん、でも余りいいイメージはないわ、兄様もでしょう。

「アーサー」

それはな・・・お前や母さんを奪ったフリージ家を、俺は恨み続けたさ。俺の手で叩き潰してやりたかった。

「ティニー」

でもね、ブルーム伯父様やイシュトー、イシュタル兄妹はそれほど悪い人では無かったの。少なくとも私や母様には良くしてくれたわ。

「アーサー」

母さんを死に追いやったのはヒルダだったな。

「ティニー」

うん、あの人だけは私も許せない。出来る事なら私の手だと思っていた・・・。

「アーサー」

ティニー、もうお前には悲しい思いはさせない、俺が守ってやる、いいな、ティニー！

ロウエン&ウォルト（前書き）

ロウレベでウォルトでございます♪やはり料理ネタは外せません（笑）

ロウエン&ウォルト

ロウエン&ウォルトC

「ロウエン」

ウォルトっ！

「ウォルト」

あつ父さん、調子はどう？

「ロウエン」

うむ、調子は万全なんだがな。ただ、実力が・・・。

「ウォルト」

またそんな事言つて。父さんは立派だよ。

「ロウエン」

そうか？どうしてそう思うんだ。

「ウォルト」

母さんから聞いたんだけど、

父さんは從騎士の時から白馬に乗つてて、何百人もの山賊を倒したんだってね。

襲われてた母さんの村を救ったんでしょ？格好いいよ。

「ロウエン」

いや、それは違ふんだ。

「ウォルト」

え？

「ロウエン」

確かに山賊を倒したが、賊は十人程度だったし、馬は栗毛だったと訂正しておいた筈なんだけどな……。

「ウォルト」

とっとにかくさ、母さんにとって父さんは白馬の王子様だったって事はよく分かったよ。

ロウエン＆ウォルトB

「ウォルト」

父さん！

「ロウエン」

おお、ウォルト。ロイ様やマーカス將軍達とのピクニックはどうだった？

ケガ……はしていないようだな。

「ウォルト」

うん、とっても楽しかったよ。父さんの「保存食袋」すつごく役に立ったし、

父さんの作ってくれたお弁当、ロイ様達喜んで食べてたよ

「ロウエン」

それは良かった。「腹満たされずして心もまた満たされず」だからな。

「ウォルト」

うん！しっかり覚えてるよ

「ロウエン」

ロイ様や、他の騎士達とは上手くやって行けそうか？

「ウォルト」

うん、エリウッド様もニニアン様も、それにマークス様やアレン様にランス様・・・

皆、とても良くしてくれるよ。でも、心配な事があるんだ。

「ロウエン」

ん？何だ？

「ウォルト」

エリウッド様や、ニニアン様の体調の事。

お二人とも、体が丈夫な方じゃないんでしょう？よく体調を崩されるから

「ロウエン」

うむ、確かにそうだな。

よし、もっと色々な食材を研究して、元氣になれる料理を作らなければ。

ウォルト、お前もまた手伝ってくれ。

「ウォルト」

うんっもちろんだよ！

ジャムカ&エーディン（前書き）

自分の中で、エーディンの相手はジャムカに決定でございます。ジャムエディ万歳！

ジャムカ&エーディン

ジャムカ& a m p ;エーディンC

「エーディン」

ジャムカ王子、貴方がこの軍に加わってくれた事…とても心強く思っています。

「ジャムカ」

どうしたエーディン、何故そんなに悲しそうな顔をする

「エーディン」

それは・・・ごめんなさい・・・。

「ジャムカ」

そうか、親父の事を気にしてくれているんだな。大丈夫、全てシグルド公子に聞いたよ。

「エーディン」

ですが、貴方の払った犠牲を思うと私は・・・。

「ジャムカ」

エーディン。俺は自分で道を選んだ、君が負担に思ふ必要は何も無い。

「エーディン」

貴方は私の恩人。どうか私で力になれる事があつたら言っして下さい。

「ジャムカ」

その言葉だけで、十分力になっている。

「エーディン」
ジャムカ・・・

ジャムカ×エーディンB（第四章）

「エーディン」

ジャムカ、この弓を使って下さい。

「ジャムカ」

これは、勇者の弓だな。俺が貰ってもいい物なのか？

「エーディン」

貴方に持っていてもらいたいのです。

シレジアの天馬騎士は恐ろしい敵、でもこの弓なら、貴方を守ってくれるでしょう。

「ジャムカ」

有難う、エーディン。この弓をお前と思って大事にするよ。
戦いが終わったら、ゆっくり会おう。

「エーディン」

ジャムカ・・・・・・・・貴方の無事を祈っています。

ジャムカ×エーディンA

「エーディン」

ジャムカ、どうしても行くのですね。

「ジャムカ」

エーデイン……。

「エーデイン」

そんな顔をしないで。言いたい事は分かっています、私はイザークへ行きます。

「ジャムカ」

オイフェ達を、そしてレスターを頼んだぞ。俺もすぐに行くから、体に気をつけて。

「エーデイン」

はい。……イザークからユングヴィやヴェルダンへは遠いですね。

「ジャムカ」

うん？

「エーデイン」

レスターやお腹の子に見せましょうね。

私が生まれたユングヴィと、貴方が生まれ、私達が巡りあったヴェルダンを。

「ジャムカ」

ああ、ヴェルダンは俺が案内する。約束しよう。

「エーデイン」

ユングヴィは私が案内します。絶対ですからね、ジャムカ……。

ノア&リリーナ（前書き）

ノア母ファリナと、リリーナ母フロリーナが姉妹の為、従兄妹設定です。

ノア&リリーナ

リリーナ&ノアC

「リリーナ」

こんにちは、あなたがノアさん？

「ノア」

ああ、そうだが君は…？

「リリーナ」

つかぬ事をお聞きますが、あなたの母上はファリナ、と言つのは？

「ノア」

？何故母の名を？

「リリーナ」

嬉しいつやつと会えたわ！私はオスティアのリリーナ、フロリーナの娘です！

「ノア」

フロリーナ叔母様の？そうか君が…母から話には聞いていた

「リリーナ」

ええ、どうか宜しくね

リリーナ&ノアB

「ノア」

リリーナ様、ケガはありませんか？

「リリーナ」

ええ、大丈夫。あつあの…

「ノア」

はい？

「リリーナ」

私達、従兄妹でしょう？あなたの方が年上なのだし、その、敬語はやめてもらえると。

あなたの事をどう呼ぼうか考えていたの、

ノアお兄様じゃだめかしら？だから私の事もリリーナって…

「ノア」

それは…その、母からきつく言われていますから。

幾ら身内とは言え、立場をわきまえないと相手が困るからと

「リリーナ」

そう…なの…

「ノア」

でも、周りに人がいない時なら構わないでしょうね。母達もそうだったようですから

「リリーナ」

ありがとうつ。ねえ、ファリナ叔母様はお元気？

「ノア」

ええ、きっと

「リリーナ」

きっと？

「ノア」

両親は貿易に出てる最中で、滅多に帰ってこないんですよ

「リリーナ」

そうなの。淋しくはない？

「ノア」

いいえ。俺が小さい頃はいつも一緒にいてくれましたし、それに父も母もイリアを豊かにしようと必死なんですよ。でも、時々寄り道しているみたいですけど

「リリーナ」

寄り道？

「ノア」

何でも、どこかに隠された海賊王の財宝があるそうです

リリーナ&ノアA

「リリーナ」

ねえ、ノアさん。もしこの戦いが終わったらあなたはどつするの？
またイリアへ？

「ノア」

ええ、きっとそうなるでしょうね。

「リリーナ」

オスティアに…一緒に来てはくれないの？

「ノア」

そうしたい気持ちもあります。でも、俺は自分の力を試したい。
傭兵団の一騎士ではなく、一人の傭兵騎士となって。
その為に大陸中を回ってみたいと思っています

「リリーナ」

そう、そうなの…この戦いが終わったら、きっと今まで以上に会えなくなるわね

「ノア」

…確かに。こうして会えたのも、運がいいとしか言いようが無いですから

「リリーナ」

…

「ノア」

だから、一人の傭兵騎士となったら各地を回りつつ、
機会がある度に貴方を訪ねにオスティアへ行きます。かつての母達
のように

「リリーナ」

ありがとっつあなたが訪ねて来るのを楽しみにしているわ。でも、
今は側にいさせてね。

あなたの話を色々聞かせて欲しいの、もちろん私の話も聞いてね

「ノア」

ふふっ もちろんです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1697b/>

支援会話シリーズ

2010年10月8日23時48分発行